

## 大阪ロータリークラブ創設者を偲ぶ

…星野行則翁の面影…



【註 下記は昭和46年10月8日尾形ガバナーが当クラブを公式訪問された際、星野翁について語られたが、其の内容は翁の面影を伝えるに最も相応しいものと思うので、其の概要を借用して掲げることとした。】

大阪ロータリークラブの初代の会長をつとめられた星野行則さんについてはまだまだ皆さんの中にはご存じの方が相当におられると思いますが、私は縁あって星野さんには、ずいぶん若いときから、いろいろとお世話にもな

り、かわいがっていただいたもので、ことに第一線を退かれてから、晩年亡くなる前までのその間は、一番親しくいろいろと教えを受けた1人であります。そこで星野さんをご存じでない方のために、ちょっと簡単にその略歴を申し上げます。

星野さんは明治3年8月九州の島原で生まれられました。明治維新直後で、おとうさんがいわゆる家禄を失われたため非常な貧窮の中で小学校の課程を終えられたのであります。上級学校へ進む志は十分におありだったんですが、家庭の事情が許さない。それで働きながら自習しておられた。その間に、福沢諭吉先生、あるいは新島襄先生方の精神に触れられ、特に新島精神に触れられて、そして、ある機会を得て大阪に出て来られ当時の川口居留地にあった聖三一神学校、ここに入る機会を得られたのであります。

そこを出られてから、次に明治の女傑と言われた広岡浅子女史の知遇を得られてアメリカに留学の機会を持たれ、帰られるとこの広岡家の事業、加島銀行その他の事業の経営に当たられ

たのであります。これが大体明治30年ごろのことで、それから昭和5年第一線を退かれるまで30年間大阪におられて、内外の実業界の活動に非常に幅広く当たられ、そして日本の財界を代表するお1人であったことはご存じのことと思います。

星野さんは、非常に**合理主義と進歩的**な、そして先を見る見通しのある方であったことがよく言われております。ご事業のほうのことはここで触れませんが、ご承知のように1911年にテラーが「科学的管理法」と言われている「プリンシプル・オブ・サイエンティフィック・マネージメント」という本をあらわしますとすぐに、そのあとで、「学理的事業管理法」という題でこれを全訳され、世に公にされました。これはわが国におけるその後の産業能率研究、また今日に続くところの経済の合理化、近代化、それと非常に深いつながりがあり、この能率研究の先駆をなすった方であると思えます。

次に**青少年問題**、若い者に対して非常に関心を持っておられました。明治の末期から、この青少年の健全育成ということに心を寄せられ、そのために大阪のYMCAの運動に参加されたの

であります。大正の終わりに、いまの土佐堀にあるあの会館の浜通のほうのもの、昔の名高い土佐堀青年会館と云った煉瓦建てをつぶして、新しい会館ができますときには、自ら建築委員長となって、その達成に非常に努力されました。続いて十年間理事長として、今日の大阪YMCAの発展の土台をつくられたのであります。

もう1つこれはあまり世の中に知られておらないことで、ひそかになすっておったことがあります。それは**育英一心社**というものを財団法人として設けられたことでもあります。そのいきさつについて一寸申し上げますと、星野さんの親友に佐藤伊三郎さんという株式仲買人として成功された方があり、幸福な生活を送っておられたのが好事魔多し、ふとした病で夫人を喪われ、更に一ヶ月と経たぬ内に一子一郎君を喪われ、忽ち失意絶望の底に落とされたのであります。星野さんは深く同情して弔問された折、君の淋しい心境を神様におすがりする気になれぬか、神様は一郎君のようなよい子を沢山持っておられるのでそれを神様より授けて見る気になれぬか、などと話し合って別れたのがキッカケで、佐藤さんは数日後星野さんを訪れ、神様のよい子を助

けるために使って呉れと金一封を星野さんに託されたのであります。星野さんは感激、直ちに友人達の協力を求め育英財団を作って一郎君の心の結晶という意味で一心社と命名し、若いそして向学心の強い前途有為な若者で学資が充分でない者に対して、これに奨学金を与え、後顧の憂いなく勉強ができるようにという目的で設けられたのであります。これは全く、あまり世には公けにされずに、ひそかになすっておられたのですが、なくなられる少し前までこのお世話はずっと続けておられました。この奨学金を受けて、当時の東大、京大その他の最高学府を出て、今日世の中で非常に活躍している方も、かなりたくさんおありのように私は星野さん自らの口から伺ったこともあります。

次に星野さんが終生力を入れられ、非常に関心を持たれたのは、**国語、国字改良の問題**と、そしてこの**ロータリー**の運動であります。

国語、国字改良については、これは、1920年に、住友の若い理事であられた山下芳太郎さん、この方がカナ文字運動を提唱し始められ、星野さんはそのときに伊藤忠兵衛さんと一緒に、この山下さんの考えに共鳴され爾

来、日本の国字改良の問題に非常な熱意をもって取り組んでこられたのであります。不幸にして山下さんは、わりに早くガンのために倒れられましたが、そのあとを受けて、今日も続けておりますカナ文字会、この会長を35年くらいお続けになりました。

こういう国字改良というような運動は、きわめてむつかしく、そう簡単に主張のようなことが世の中に行なわれるということは、ご自身も決して考えておられませんでした。どうしてもこれは大切な問題だというわけで、きわめて粘り強く、地道な運動を先頭に立って進めてこられたのであります。これは、1958年に伊藤さんにその会長の仕事をバトンタッチされるまで続けられ、ただいまは伊藤さんがそのあとを受けて、この運動に熱意を燃やしておられるわけであります。

この運動について星野さんがどれほど熱意をもっておられたか、世の中にそう共鳴者が容易にふえない運動を35年間も根強く続けられたそのこと自身でもわかりますが、この運動を始められたその初めのころに、今日相当盛んに用いられている例のカナ文字のタイプライター、このタイプライター自身はもちろん日本で発明されたものでは

ありませんが、あの文字盤——キーボードのところ、ここにカナ文字を入れてカナタイプをつくる、これを一番最初に考えられたのが山下さん、星野さん、この方たちが協力されて、そしてそのために、わざわざアメリカのアンダーウッドタイプライター会社まで出かけて、そしてその方面の専門家といろんな相談をし、勉強をして、カナ文字の配列をどういうふうにしたらいいか、どういようなものをつくったらいいか、というようにことまで熱心にやられた。そして向こうでつくられたカナ文字のタイプライターが日本に運び込まれましたが、これが日本での最初のカナタイプライターになるわけで、そういうことにも非常に熱意を傾けられたのであります。

最後に申し上げたいことはロータリーについてであります。星野さんは米山梅吉さんとともにわが国に、この組織を移して育てた親であり、東京に次いで古い大阪ロータリークラブの創立とその発展に非常な力を尽されたのであります。

私はちょうど、その時分から星野さんとだんだんいろいろと話し合う機会がありまして、大阪のクラブ初期の模様なども、何かのうちに、よく伺った

ものであります。

たとえば初めには、やはりアメリカにならって、会員の皆さんにニックネームをつけて、呼び合うということが行なわれました。星野さん自身につけられたあだ名は苦虫というあだ名だったそうですが、これは、星野さんは非常にまじめな人ですから、よそ眼にはそういうような感じを人に与えられたのでしょうか。しかし、そういうあだ名がなかなか日本人の間にうまくいかん。いつの間にか、これはやめられたようですが、そういう話もご自身から伺ったことがございます。

戦後再びR Iに日本のロータリーが復帰いたしましてR Iの第60区としてスタートした時は、全国1区でその最初のガバナーは手島知健さんでありましたがそれを継がれたのが星野さんで、1951年から1年間ガバナーをつとめられました。当時星野さんはすでに80歳をこえておられましたが、精神的には非常に元気な方ですけれども、足もとが少し弱っておられるので1人でアメリカまで出かけられることは……といって、だいぶん私どもも心配したのであります。しかし1人で出かけられ、ガバナーの研修を受けられ、アトランティックシティの大会にも出席さ

れまして、そして日本に帰られてから60幾つかのクラブを公式訪問に廻られたのであります。さらに新しいクラブの新設に力を尽され、その在任中11のクラブを作られましたが、そういうふうに、80をこえた高齢にかかわらず、ロータリーのためには非常な熱意をもって東奔西走されたのであります。

星野さんは又「一生を尊く楽しく」という題の小冊子を書かれました。これはおそらく80歳をこえてから、ぼちぼち、ひそかに書きためられたものと思いますが、その中に、星野さんの社会観をいろいろと書いておられますが、その中で最も事実と一致し、また合理的と思われる社会観は現在の社会が連帯性を持つ共同体であるとする見方であります。すなわち人々は社会の中に社会人として生存しておるが、それは共同体を構成する単位としての1員である。共同体を主体として、それをささえることによって自分も生きているということは、あたかも細胞と身体との関係に同じであり、主体を生かすために自分も生きていく。主体と自分とは互いに依存し、利害を同じくして生きておるのである。ソシアル・ソリダリティという考えをもって貫いておられたことが察せられるのでありま

す。そして、星野さんの人生観と申しますか、これもその前後に書かれておるのであります。1つは感謝、この世に自分が生命を得て生存できたということは非常に大きな意義があり喜びである。もう1つは進歩、それから自己犠牲、これを非常に強調されておるのであります。

この感謝、進歩、自己犠牲、こういう人生観と、いま申し上げました社会連帯観というものをもって、いままで申し上げたように、世のため、人のため、社会のためということ始終考え、そのために年老いゆく身も忘れて活動された方であります。

私は、この星野さんは、ブライトホルツ会長が言われました、「奉仕をもって善意を行動にあらわそう」これを身をもってほんとうになすったりっぱなロータリアンのお1人であるということ、つくづく思い出すのであります。